

筑波大学日本文学会会報

第13号

1989年1月

伊藤先生御退官によせて……………平岡敏夫……………	一
骨身惜しまぬ紳士たち―惜別の辞―伊藤博……………	二
伊藤先生との思い出……………	四
日本文学会だより……………	十
研究室だより……………	十一
卒業生だより……………	十四
日本文学会教官学生名簿……………	十八

伊藤先生御退官によせて

平 岡 敏 夫

伊藤先生にはじめてお目にかかったのは、東京教育大学文学部の非常勤講師の折、国文の先生方が親睦・慰労のため、招いて下さったときだと思う。池袋あたりの二階の一室で、その時の印象は漠然としたものしか今はないが、昭和五十年、筑波大学最初の近代文学の集中講義に出かけた折、先生の竹園の前のおうちに泊めていただいた時の記憶は鮮烈である。

ちょうど国鉄がストの時、奥様が不在であり、先生は飯のたきかたも味噌汁の作りかたも知らなかったもので、私が何日間か食事を作り、また近くの本陣といった居酒屋へ二人で飲みに出かけたりした。一番いい部屋で、新婚の時以来という上等なふとんと毛布にくるまって寝た思い出は、先生の暖いお人柄とともに忘れられない。昨秋、御郷里信州高遠で万葉学会が開催された折、大盛会の聴衆を前にして、私は次のように語った。

伊藤先生の御学問、人となりにつきましては私などが云々するまでもなく、文字どおり有難い存在でございますが、昨年夏から年末まで私がアメリカの大学におりました時、先生から頂戴した墨痕鮮やかな数々の暖いお手紙のことは忘れることができません。私が帰国いたしましたあとの筑波大学日本文学会で伊藤先生は万葉集の歌群の構成を論じられました、その折、先生は私の住復書簡

を例にとられ、私の無事の帰国をひそかに祝って下さったのであります。思い出すだに今も深い感動と感謝を覚えずにはいられません（後略）。

伊藤先生が本学、さらに日本文学の研究と教育に尽された御功績は言い尽せないが、私をふくめて個々の一人ひとりにとっても、先生からいただいた御学思・御厚情はかぎりなく深い。別れはさびしいけれども、先生のますますの御健勝とかわらぬ御指導を思うばかりである。

骨身惜しまぬ紳士たち―惜別の辞―

伊 藤 博

停年制を敷く職場に務める者にとって、生涯に最少一度だけは自分の思う通りの葬式のできる機会があるはずで、それは退休の時を措いてはないと、ずっと思い続けてきた。その「思う通りの葬式」とは次のごとし。

(一) 停年の年に我が身に合う形の萬葉学会全国大会を行ない、停年行事に替えること。

(二) 論文を学系の機関誌に寄せて、いわゆる停年退官講義に替えること。

(三) 最後の三月三十一日、研究室を完全に清めたのち、夕方静かに大学を去ること。

右のうち、(一)の「我が身に合う形」とは、この身の原核を育ててくれた信州高遠町を会場として、筑波大学の力量を背景に全国大会を行なう、したがって、伊藤博は表面に一切顔を出さない、というものである。これは、昭和六十三年十月二十八日〜十一月一日、曾てない盛会をもって実現した。大会には、平岡・谷脇両教授の参加を得、平岡教授は講演会の閉会の辞を見事に務めて下さった。この間、桑原教授は大学にとってきわめて重要な公用の旅にあり、奥野・犬井・新保の諸教官は留守を守って下さった。さらにその陰には、院生たちの涙ぐましい労力があつた。萬葉学会代表からは「骨身惜しまぬ紳士たち」というお褒めの言葉を頂いた。まさに、「我が身に合う形」の大会だったというべきである。

(二)は、八月中に原稿を書き終えて、期限の九月十二日に奥野紀要委員長に提出した。題して「萬葉歌釋注―停年退官講義に替えて」。ちょうど辞める月の三月に刊行されるといふから、まことにもって具合がいい。ただし、副題は奥野委員長の忠告によって削った。

内容を見ればわかるので、そこまで歌うのは露骨にすぎるであろう。友の言やよし。

〔三〕は一人二役の野辺送りのようなものだ。暗い夜道を歩いて帰って、一夜、多年苦勞をかけた山妻と盃を傾けるのであろう。本人がそこに存在するのだから、しめっぽい空気が漂うはずはあるまい。

以上のような次第であるけれども、これに対しては恰好がよすぎるといふ批評がある。送る側の立場に対する配慮が欠けているといふのであるらしい。萬葉学者のはしくれ伊藤博としては、〔一〕と〔二〕においてその辺のことに気を配ったつもりだが、この考えは普通ではないらしく、なかなか理解して貰えない状況にある。今では、最終の授業のある日に、何らか形を整えなければなるまいと思っている。

私は、昭和二十九年の十二月十三日に結婚した。その時、旧制中学時代からの日記を全部焼いた。学者として立つ身には、その足跡として論文以外は不要と考えたからである。よって、爾後、日記を書いていないことは言うに及ばない。その代り、発表論文の記録だけは丹念に残した。そして、停年退休にあたり、その一応の完結本を作りつつある。作りつつあると言っても、実際は上代専攻の院生たちにお願しているのだが、二年間の京都大学、九年間の専修大学、そして十四年間の筑波大学の方々には、貰って下さる方があれば、感謝のしるしに、この一応の完結本（ただしホツキス綴じ）を一冊ずつ献呈したいと思っている。

来る三月三十一日の夜、この一冊を見つめつつ、私は老妻とさまざまな話に興ずるのであろう。わけでも、想起されるのは、十四年間に接したあれやこれやの学生たちの表情にちがいない。さらには、十四年間協力を惜しまれることのなかった教授陣にちがいない。例えば、私が赴任した昭和五十年には、日本文学陣は桑原さんと奥野さんがいるだけであった（小西さんは副学長）。そのあと、喜んで赴任して下さったのが平岡さん以下四人。その間のたった一つの仕事として誇りうるのは、このすぐれた人々六人と共に、おそらくは世間にそうざらにはない研究室を創り出したということであろうかと思う。

「筑波大学に栄えあれ、筑波大学日本文学研究室よいやまされ」——そう心に叫んで、その夜の眠りに、私はつくにちがいない。明けての四月一日からは、「〒一九一 日野市程久保二―五―二五」に住む。電話はない。

（昭和六十三年十二月二十日稿）